

正史を訪れる

十四章 百濟本記

森隆一



百濟 王冠

(Wikipedia

「百濟」より)

/

A 系統

14.1. 第1代 AI 温祚王 91-136, BC18-28

% A4, 123, 6911 百濟 01

“父は鄒牟、あるいは朱蒙という。北扶餘より難を逃れ、卒本扶餘に到達した。扶餘王には男子が無く、3人の女子がいた。朱蒙の非凡であることを知り、二女を妻とした。しばらくして、扶餘王が薨じ、朱蒙が跡を継いだ。二子が生まれ、長子を沸流、次子が温祚といった。ここで、朱蒙が北扶餘にいたときにできた子が来て太子とした。沸流と温祚は太子に受け入れられないことを恐れ、烏干・馬黎ら十臣と南に行った。百姓で従うものが多数いた。漢山に着いた。・・・温祚は河南の慰禮城をみやことし、十臣を補佐とした。国を十濟とした。前漢の成帝鴻嘉三年のことである。”

父鄒牟 或云朱蒙 自北扶餘逃難 至卒本扶餘 扶餘王無子 只有三女子 見朱蒙 知非常人 以第二女妻之 未幾 扶餘王薨 朱蒙嗣位 生二子 長曰沸流 次曰温祚（或云朱蒙到卒本 娶越郡女 生二子） 及朱蒙在北扶餘所生子來爲太子 沸流・温祚 恐爲太子所不容 遂與烏干・馬黎等十臣南行 百姓從之者多 遂至漢山 登負兒嶽 望可居之地 沸流欲居於海濱 十臣諫曰 惟此河南之地 北帶漢水 東據高岳 南望沃澤 西阻大海 其天險地利 難得之勢 作都於斯・・・温祚都河南慰禮城 以十臣爲輔翼 國號十濟 是

前漢成帝鴻嘉三年也

成帝鴻嘉三年は BC18 年である。

扶餘王は卒本扶餘にいたようだが、北扶餘と卒本扶餘との関係は？

“元年 五月 東明王廟を立てた。”

立東明王廟

“二年 96, BC17 正月 王は群臣にいった：靺鞨は我が北境に連なる。その人は勇ましいが嘘をつく。兵を練り、穀を貯え、守りの計を謀るべし。”

群臣曰 靺鞨連我北境 其人勇而多詐 宜繕兵積穀 爲拒守之計

この後も靺鞨との抗争が何回も出てくる。これは(前)百済が靺鞨と戦いができる位置に居たことになるのか。

Wikipedia「靺鞨」では

靺鞨は、中国の隋唐時代に中国東北部・沿海州に存在した農耕漁労民族。南北朝時代における勿吉の表記が変化したものであり、肅慎・挹婁の末裔である。16 部あったが、後に高句麗遺民と共に渤海国を建国した南の粟末部と、後に女真族となって金朝・清朝を建国した北の黒水部の 2 つが主要な部族であった。

正史では、靺鞨は隋書、勿吉は魏書、肅慎は晋書で、三国志・後漢書では挹婁が用いられている。

挹婁：yī lóu、肅慎：sù shèn、勿吉：wù jí、靺鞨：wà shé

“三月 王は族父の乙音を、知識と胆力ゆえ、右輔とし、兵馬事を委ねた。”

王以族父乙音 有智識膽力 拜爲右輔 委以兵馬之事

“三年 97, BC16 九月 靺鞨が北境を侵した。王は精兵をひきいてこれを急激し大勝した。賊の生還者は十に一二であった。”

靺鞨侵北境 王帥勁兵 急擊大敗之 賊生還者十一二

“四年 98, BC15 八月 樂浪に修好の使いを派遣した。” 遣使樂浪修好
樂浪郡が近い。あるいは、樂浪郡が四郡の主。

“八年 102, BC11 二月 靺鞨賊三千が慰禮城を囲んだ。王は城門を閉ざし出撃しなかった。10 日ほど経ち、続は糧食が尽き帰った。王は鋭兵を選び、大斧峴まで追求して戦い勝った。” 靺鞨賊三千 來圍慰禮城

王閉城門不出 經旬 賊糧盡而歸 王簡銳卒 追及大斧峴 一戰克之 殺虜五百餘人

“七月 馬首城と豎瓶山柵を築いた。・・・これゆえ、樂浪郡と不和になった。” 築馬首城 豎瓶山柵 樂浪太守使告曰・・・由是 與樂浪失和

“十年 104, BC9 九月 王は獵をし、神鹿を捕らえた。これを馬韓に送った”。

王出獵 獲神鹿 以送馬韓

“十月 靺鞨が北境を寇した。王は二百の兵を派遣し、昆彌の川上で戦ったが、我が軍は破れた。”

靺鞨寇北境 王遣兵二百 拒戰於昆彌川上 我軍敗績

“十一年 105, BC8 四月 樂浪郡は靺鞨を使い破瓶山柵を襲った。百人余りを殺掠した。” 樂浪使靺鞨襲破瓶山柵 殺掠一百餘人

“七月 禿山と拘川 2 柵を設け、樂浪の路を塞いだ。”

設禿山・拘川兩柵 以塞樂浪之路

“十三年 107, BC6 五月 王は臣下にいった：国の東には樂浪郡があり、北には靺鞨がいる。．．．(訳)”

王謂臣下曰 國家東有樂浪 北有靺鞨 侵軼疆境 少有寧日 況今妖祥 屢見 國母棄養 勢不自安 必將遷國 予昨出巡 觀漢水之南 土壤膏腴 宜都於彼 以圖久安之計

“七月 漢山下の柵を立て、慰禮城の民戸を移した。”

就漢山下 立柵 移慰禮城民戸

“八月 馬韓に使いを送り、遷都を告げ、境界は北は河南は熊川西は大海東は極走壤とした。”

遣使馬韓 告遷都 遂畫定疆場 北至河 南限熊川 西窮大海 東極走壤

“城を建てた。 城を建てた。．．．”

立城．．．

百濟の位置は樂浪郡の東になる。

“十四年 108, BC5 正月 遷都した。”

遷都

“七月 漢江の西北に城を築き、漢城の民を分けた。” 築城漢江西北 分漢城民

“十五年正月 新宮室を造った。”

作新宮室

十一年までは靺鞨、十三年以降は南に方向転換。話としては、宋書の高麗略有遼東 百濟略有遼西 がこの間に入るのが自然。

漢山城を建てたのか。馬韓への通告といい遷都などは、帶方郡滅亡の後

と考えるのが自然と思われる。

城は漢城から見て、漢江を西北に渡った所。京城か？遷都の時期は疑わしい。この時期ならば、後漢書や三国志に書かれているはずである。書かれていないのはこの時期ではない。

今のところ、帶方郡滅亡の辺りが妥当と考える。上の仮説が合っていれば、樂浪郡に追われて、馬韓の地に逃げたことになる。後半の記事では、百済の馬韓浸出には早すぎる。(漢城を都とする)百済が成立したのは樂浪郡・帶方郡が滅びた313年辺り。滅亡の前から、帶方郡の力は衰えていたはずで、力の及びにくい南部で(前)百済が成立していた可能性は残る。北の河の名前が無い。漢江でなく、南の河とし、現在の夫餘か公州あたりとすれば、馬韓の南辺とも考えられる。あるいは、錦江の上流地域か。

修正年譜からは、靺鞨の地にいたのが温祚王からB系統の王、熊川辺りにいたのがC系統の王で、これに関する記事を古くから、馬韓にいたように温祚王に移した。

“十七年 111, BC2 春 樂浪郡が來侵し、慰禮城を焚やした。”

樂浪來侵 焚慰禮城

“四月 廟を立て、国母を祀った。”

立廟以祀國母

“十八年 112, BC1 十月 靺鞨がにわかに来た。王は兵を率い、七重河で迎え撃った。酋長素牟を捕獲し、馬韓に送った。他の賊は埋めた。”

靺鞨掩至 王帥兵 逆戰於七重河 虜獲酋長素牟 送馬韓 其餘賊盡坑之

“十一月 王は樂浪郡の牛頭山城を襲おうとしたが、白谷に着いたとき、大雪が降り、還った。” 王欲襲樂浪牛頭山城 至白谷 遇大雪乃還

“二十年 114,2 二月 王は大壇を設け、天地を祀った。” 王設大壇 親祠天地

“二十二年 116,4 八月 石頭と高木の二城を築いた。” 築石頭・高木二城

“九月 王は騎兵一千を率いて、遼東を獵斧した。靺鞨賊と出会い、一戦これを破った。虜獲した生口は將士の分配した。”

王帥騎兵一千 獵斧遼東 遇靺鞨賊 一戰破之 虜獲生口 分賜將士

“二十四年 118,6 七月 王熊川柵を造った。馬韓王は使いを送り。．．．”

王作熊川柵 馬韓王遣使責讓曰．．．

“二十六年 120,8 七月 王は言った： 馬韓は漸弱で上下は離心している。．．．”

王曰 馬韓漸弱

上下離心 其勢不能久 儻爲他所并 則唇亡齒寒 悔不可及 不如先人而取之 以免後艱

“十月 王は出師した。田獵と偽り、馬韓を襲った。”

王出師 陽言田獵 潛襲馬韓

“二十七年 121,9 四月 二城を下し、その民を漢山の北に移した。馬韓は遂に滅びた。”

二城降 移其民於漢山之北 馬韓遂滅

“七月 大豆山城を築いた。” 築大豆山城

正史では晋の時代まで馬韓は存在した。樂浪郡の存在の下で、馬韓を滅ぼすことが可能とは思えない。

“三十一年 125, 13 正月 国内の民戸を南北部に分けた。” 分國內民戸爲南北部

“三十三年 127, 15 八月 東西二部を加えた。”

加置東西二部

“三十四年 128, 16 十月 馬韓の舊將周勤は牛谷城よって叛いた。王みずから兵五千を率いてこれを討った。”

馬韓舊將周勤 據牛谷城叛 王躬帥兵五千 討之

“三十六年 130, 18 七月 湯井城を築き、大豆城の民戸を分けて住まわせた。”

築湯井城 分大豆城民戸居之

“八月 葺圓山と錦の二城を修復し、古沙夫里城を築いた。”

修葺圓山・錦二城 築古沙夫里城

“三十七年 131, 19 六月になって雨が降った。漢水東北の部落は飢餓になり、千人余りが高句麗に逃亡した。湏帶の間は人が消えた。”

至六月乃雨 漢水東北部落饑荒 亡入高句麗者一千餘戸 湏帶之間 空無居人

“四十年 134, 22 九月 靺鞨が述川城を來攻した。”

靺鞨來攻述川城

“十一月 又斧城を襲い、百人余りを殺掠した。王は精銳二百騎でこれを撃退させた”

又襲斧城 殺掠百餘人 王命勁騎二百拒擊之

“四十一年 135, 23 正月 右輔の乙音が卒した。北部解婁を右輔とした。解婁は本は扶餘人である。．．．”

右輔乙音卒

拜北部解婁爲右輔 解婁本扶餘人也 神識淵奧 年過七十 膂力不愆 故用之

“四十三年 137, 25 十月 南沃沮の仇頗解ら二十餘家が斧壤に就いて款を納

めた。王はこれを納め漢山の西に安置した。”

南沃沮仇頗解等二十餘家 至斧壤納款 王納之 安置漢山之西

“四十六年 140, 28 二月 王は薨じた。”

王薨

修正新羅本紀の温祚王の即位年 127 年よりかなり前。4 代までの王の在位を平均 30 年とすればかなり近づく。この王の記事を見ていると、紀における神武東征と似た感じを受ける。百済が馬韓の地に古くからいたようにする意図があるのではないか。方法として想いつくのは、高句麗や新羅を考慮する必要のない記事をここに持ってくることである。

この時期の位置については長白山脈のどこかを想定している。蓋馬高原が有力と思う。 図{東夷の変祖遷 1} 右 の穢貊の辺りである。

この図については、朝鮮半島の各国はもう少し北にあると考えている。この図の東沃の東辺りが有力と考えている。両者と年代を繰り上げている可能性は残る。

小水貊は西安平の北にいた。三国の位置関係は、樂浪郡が平壤辺りで北朝鮮の西部。その北に高句麗で、長白山脈の西。百済は、樂浪の東南部で高句麗とは接していない。新羅は東部太白山脈地帯で、三者と接している。

漢四郡のうち樂浪郡しか現れない。

真番郡と臨屯郡は BC82 年に廃されたことから、現れないのは自然である。

玄菟郡が現れないことから、5.5 節で引用した Wikipedia「玄菟郡」の第三玄菟郡(107)以降と考えるのが妥当ではないか。

地名：

慰禮城(河南・靺鞨)、馬首城(樂浪郡)、豎瓶山柵(樂浪郡)、昆彌川(靺鞨)、破瓶山柵(樂浪郡・靺鞨)、禿山柵(樂浪郡)、拘川柵(樂浪郡)、漢城、七重河(靺鞨)、慰禮城(樂浪郡)、牛頭山城(樂浪郡)、石頭城、高木城、王熊川柵(馬韓)、大豆山城、牛谷城(馬韓)、湯井城、大豆城、葺圓山城、錦城、古沙夫里城、述川城(靺鞨)、又斧城(?)

14.2. 第2代 A2 多婁王 136-185, 28-77

% A4, 125, 7062 百濟 01

“二年 137, 29 正月 東明廟で始祖に謁えた。”

謁始祖東明廟

“二月 王は南壇で天地を祀った。”

王祀天地於南壇

“三年 138, 30 十月 東部訖于と靺鞨が馬首山の西で戦い、これに克った。”

東部訖于與靺鞨戰於馬首山西 克之

“四年 139, 31 八月 高木城昆優と靺鞨が戦い、大勝であった。斬首は二百級を越えた。”

高木城昆優與靺鞨戰 大克 斬首二百餘級

“六年 141, 33 二月 国南の州郡に稻田を作することを命じた。”

下令國南州郡 始作稻田

“七年 142, 34 二月 右輔の解婁が卒した。90 歳であった。東部訖于を右輔とした。”

右輔解婁卒 年九十歳 以東部訖于爲右輔

“九月 靺鞨が馬首城を攻め陥れた。火を放ち百姓の廬屋を焼いた。”

靺鞨攻陷馬首城 放火燒百姓廬屋

“十月 また、瓶山柵を襲った。”

又襲瓶山柵

州郡があったのか？

解婁は温祚王四十一年に右輔となった。解婁は北部とあった。部は高句麗の五部のようなものか。

“十年 145, 37 十月 右輔の屹子を左輔とし、 北部眞會を右輔とした。”

右輔屹子爲左輔 北部眞會爲右輔

“十一年 146, 38 十月 王は東西兩部を王巡撫東西兩部した。貧しく生きていけない人に穀を二石与えた。” 王巡撫東西兩部 貧不能自存者 給穀人二石

“二十八年 163, 55 八月 靺鞨が北鄙を侵した。” 靺鞨侵北鄙

“二十九年 164, 56 二月 王は東部に牛谷城を築くことを命じた。もって靺鞨に備えた。” 王命東部 築牛谷城 以備靺鞨

“三十六年 171, 63 十月 王は開拓し娘子谷城に至った。新羅に使いを遣り合おうとしたが、受け入れられなかった。”

王拓地至娘子谷城 仍遣使新羅請會 不從

“三十七年 172, 64 王は兵を派遣し新羅の蛙山城を攻めたが、出来なかった。狗壤城を替わりに攻めたが、新羅騎兵二千を出したが、撃走させた。”

王遣兵攻新羅蛙山城 不克 移兵攻狗壤城 新羅發騎兵二千 逆撃走之

“三十九年 174, 66 蛙山城を攻め取った。守りに二百人を留めたが、新羅に敗れた。” 攻取蛙山城 留二百人守之 尋爲新羅所敗

“四十三年 178, 70 兵を派遣し新羅を侵した。” 遣兵侵新羅

“四十七年 182, 74 八月 將を派遣し新羅を侵した。” 遣將侵新羅

“四十八年 183, 75 十月 再び蛙山城を攻め、これを抜いた。”

又攻蛙山城 拔之

“四十九年 184, 76 九月 蛙山城を新羅に奪い返された。” 蛙山城爲新羅所復

“五十年 185,77 九月 王は薨じた。”

王薨

蛙山城は今後も現れる。Google で「蛙山城」を検索でヒットした朝鮮語のサイト <http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/Item/E0038935> の Google 翻訳では、項目が「ワサン性（蛙山城）」で、

忠清南道報恩郡付近に比定されている三国時代、百済と新羅の激戦地であった城。この他に、娘子谷城を今日の忠清北道清州一帯に比定する見解 も言及されている。と書かれている。

Wikipedia「報恩郡」では

報恩郡は、大韓民国忠清北道の南部にある郡である。東側を慶尚北道と接している。慶尚北道との境界には小白山脈が走り、俗離山と呼ばれる花崗岩の険しい連峰が国立公園に指定されている。俗離山は文蔵台や最高峰の天王峰ほか多数の峰からなり登山客も多い。また山麓の俗離山面には、曹溪宗に属する 653 年創建の古刹・法住寺がある。

地名：高木城(靺鞨)、馬首山(靺鞨)、馬首城(靺鞨)、瓶山柵(靺鞨)、牛谷城(靺鞨)、娘子谷城(新羅)、蛙山城(新羅)

14.3. 第3代 A3 己婁王 185-236, 77-128

% A4, 126, 7110 百濟 01

“九年 193, 85 正月 兵を派遣し新羅の辺境を侵した。” 遣兵侵新羅邊境

“二十九年 213, 105 新羅に使いを送り和を求めた。” 遣使新羅請和

“三十二年 216, 108 七月 靺鞨は牛谷に入り、民を奪掠した。”

靺鞨入牛谷 奪掠民口而歸

“三十七年 213, 113 新羅に進物の使いを送った。” 遣使聘新羅

“四十九年 233, 125 新羅は靺鞨に侵され、兵を請うた。王は五將軍を派遣し救けた。” 新羅爲靺鞨所侵掠 移書請兵 王遣五將軍救之

“五十二年 236, 128 十一月 王は薨じた。” 王薨

在位期間は 52 年であるが、記事が少なく、各記事も簡単である。

謁始祖・祀天地は無し。

地名：牛谷(靺鞨)

14.4. 第4代 A4 蓋婁王 236-274, 128-166

% A4, 126, 7134 百濟 01

“五年 240, 132 二月 北漢山城を築いた。”

築北漢山城

十一年から二十七年まで記事無し。

“二十八年 263, 155 十月 新羅の阿吉は謀叛が露見したため、來奔した。新羅王は引き渡しを求めたが、受け入れなかった。新羅王は怒って、自ら來伐したが、諸城の守りを堅め出撃しなかったため、新羅兵は糧食が絶え歸った。”

新羅阿吉宣謀叛

事露來奔 羅王移書請之 不送 羅王怒 出師來伐 諸城堅壁自守不出 羅兵絶糧而歸

“三十九年 274, 166 王は薨じた。”

王薨

B 系統

14.5. 第5代 B1 肖古王 238-286, 166-21

% A4, 127, 7157 百濟 01

“二年 239, 167 七月 新羅の西鄙二城を襲破し、男女一千を捕虜とした。”

潜師襲破新羅西鄙二城 虜獲男女一千而還

“八月 新羅王は一吉?と兵二万を派遣し、東部の諸城を來侵した。また、自ら精騎八千を率いて漢水に至った。これに敵わず略奪された。”

羅王遣一吉浚興宣 領兵二萬 來侵國東諸城 羅王又親帥精騎八千繼之 掩至漢水
王度羅兵衆不可敵 乃還前所掠

“五年 242, 170 十月 新羅に出兵し邊鄙を侵す。”

出兵侵新羅邊鄙

六年 242, 170 から二十年まで記事なし。

“二十三年 260, 188 二月 宮室を重ねて修理した。出師し新羅母山城を攻める。”

重修宮室 出師攻新羅母山城

“二十四年 261, 189 七月 我が軍と新羅は狗壤で戦い敗北した。死者は五百人餘であった。”

我軍與新羅戰 於狗壤敗北 死者五百餘人

“二十五年 262, 190 八月 兵を出し新羅の西境の圓山郷を襲い、進んで缶谷

城を圍んだ。新羅の將軍仇道が帥馬兵五百とこれを拒み、我が兵は退いた。
仇道は追いかけ、蛙山我が兵は反撃し、大いに打ち勝った。”

出兵襲新羅西境圓山郷 進圍缶谷城 新羅將軍仇道帥馬兵五百拒之 我兵佯退 仇道
追至蛙山 我兵反撃之 大克

“三十四年 269, 199 七月 地震があつた。兵を派遣し、新羅の邊境を侵し
た。”

地震 遣兵侵新羅邊境

“三十九年 278, 204 七月 兵をだし、新羅の腰車城を攻め、これを陥れ、城
主薛夫を殺した。新羅王奈解は怒り、伊伐?1 利音を將に命じ、帥六部精兵
を率いて、我が沙?2 城を攻めた。”

出兵攻新羅腰車

城拔之 殺其城主薛夫 羅王奈解怒 命伊伐淦利音爲將 帥六部精兵 來攻我沙峴城

王名はまれ、新羅王奈解。第 10 代 昔 3 奈解尼師今 269-303, 197-
231, 196-230

新羅の將軍仇道、仇道は見た気がする。第 13 代 金 1 味鄒尼斯今 334-
356, 262-284 二月 親祀國祖廟 大赦 封考仇道爲葛文王

“四十五年 282, 210 二月 赤峴と沙道の二城を築き、東部の民戸を移した。”

築赤峴沙道二城 移東部民戸

“十月 靺鞨が沙道城來攻したが負けて、城門を焼いただけで遁げた。”

靺鞨來攻沙道城不克 焚燒城門而遁

“四十九年 286, 214 九月 北部眞果に命じて、領兵一千で靺鞨の石門城を襲

い取った。”

命北部眞果領兵一千 襲取靺鞨石門城

“十月 靺鞨の勁騎が于述川まで來侵した。”

靺鞨以勁騎來侵 至于述川

“王は薨じた。”

王薨

謁始祖・祀天地は無し。

地名：新羅母山城、狗壤(新羅)、圓山郷(新羅)、缶谷城(新羅)、腰車城(新羅)、赤峴城、沙道城、石門城(靺鞨)

14.6. 第6代 B2 仇首王 貴須王 286-306, 214-234

% A4, 127, 7198 百濟 02

“三年 288, 216 八月 靺鞨が来て赤峴城を囲んだが、城主は固く守ったため、退け歸った。王は勁騎八百でこれを追わせ、沙道城下でこれを破った。”

靺鞨來圍赤峴城 城主固拒 賊退歸 王帥勁騎八百 追之 戰沙道城下破之 殺獲甚衆

“四年 289, 217 二月 沙道城の側に二柵を設けた。東西に十里の距離にある。赤峴城の兵卒を分けてこれに充てた。”

設二柵於沙道城側 東西相去十里 分赤峴城卒戍之

“五年 290, 218 王は兵を派遣し、新羅?山城を囲んだ。新羅王は自ら兵を率い撃ってきたので、我が軍は敗れた。”

王遣兵圍新羅獐山城 羅王親帥兵擊之 我軍敗績

“七年 292, 220 十月 王城の西門が燃えた。靺鞨が北邊に侵入したので兵を派遣し拒んだ。”

王城西門火 靺鞨寇北邊 遣兵拒之

“九年 294, 222 十月 兵を新羅牛頭鎮に侵入させ、民戸を掠めた。新羅の將忠萱は兵五千を率いて熊谷で戦ったが大敗した。”

遣兵入新羅牛頭鎮 抄掠民戸 羅將忠萱領兵五千 逆戰於熊谷大敗 單騎而遁

“十一年 296, 224 七月 新羅の一吉漚の連珍が來侵した。於烽山下で迎え撃ったが、克てなかった。”

新羅一吉漚連珍來侵 我軍逆戰於烽山下不克

“十六年 301, 229 十一月 靺鞨が牛谷界に入り、人物を掠め奪った。王は精

兵三百を派遣し迎え撃ったが、賊に伏兵があり、我軍大敗した。

靺鞨入牛谷界 奪掠人物 王遣精兵三百拒之 賊伏兵夾撃 我軍大敗

“二十一年 306,234 王は薨じた。”

王薨

謁始祖・祀天地は無し。

地名：赤峴城(靺鞨)、新羅?山城、新羅牛頭鎮

14.7. 第7代 B3 沙伴王 234-234

%% A4, ,7228 百済 02

三国史記には無い。

14.8. 第11代 B4 比流王 306-346, 304-344

%% A4, ,7236 百濟 02

“九年 314, 312 四月 東明廟にまみえた。解仇を兵官佐平とした。”

謁東明廟 拜解仇爲兵官佐平

“十年 315, 313 正月 南郊で天地を祀った。”

祀天地於南郊

“十八年 323, 321 正月 王の庶弟の優福を内臣佐平とした。”

以王庶弟優福爲内臣佐平

“二十四年 329, 327 九月 内臣佐平の優福が北漢城にたてこもり叛いた。王は兵を發し、これを討った。”

内臣佐平優福 據北漢城叛 王發兵討之

“三十年 335, 333 七月 宮室を修築した。眞義を内臣佐平とした。”

修宮室 拜眞義爲内臣佐平

“三十四年 339, 337 二月 新羅が進物の使いをよこした。”

新羅遣使來聘

“四十一年 346, 343 十月 王は薨じた。”

王薨

C 系統

14.9. 第8代 C1 古尔王 274-326, 234-286

%% A4, ,7263 百濟 02

“仇首王は在位二十一年で薨じた。長子の沙伴が嗣ごうとしたが、幼少で成務を行えなかった。肖古王の母の弟古尔が即位した。”

仇首王在位二十一年薨 長子沙伴嗣位 而幼少不能爲政 肖古王母弟古尔即位

“五年正月 鼓吹を用いて天地を祭った。”

祭天地用鼓吹

“七年 280, 240 兵を派遣し新羅を侵した。”

遣兵侵新羅

“四月 眞忠を左將とした。内外兵馬の事を委ねた。”

拜眞忠爲左將 委以内外兵馬事

“九年 282, 242 二月 南澤で稻田の開墾を国人に命じた。”

命國人開稻田於南澤

“四月 叔父の質を右輔とした。性質は忠毅で、謀事もない。”

以叔父質爲右輔 質性忠毅 謀事無失

“十年 283, 243 正月 大壇を設け、天地山川を祀った。” 設大壇 祀天地山川

“十三年 286, 246 八月 魏の幽州刺史の母丘儉と樂浪太守の劉茂・朔方太守の王遵は高句麗を伐った。王はこれに乘じ、左將眞忠を派遣し、樂浪郡の

辺民を襲い取った。茂はこれを聞き怒ったが、王は恐れながら侵討し、民を還した。”
魏幽州刺史毋丘儉與樂浪太守劉茂・朔方太守王遵

伐高句麗 王乘虚遣左將眞忠 襲取樂浪邊民 茂聞之怒 王恐見侵討 還其民口

“十四年 287, 247 正月 南壇で天地を祭った。” 祭天地於南壇

“眞忠を右輔とした。眞勿を左將とし、兵馬の事を委ねた。”

二月 拜眞忠爲右輔 眞勿爲左將 委以兵馬事

“軍を出し新羅を侵し、新羅兵と槐谷西で戦い、これを破り、その將翊宗を殺した。”

二十二年 295, 255 月 出師侵新羅 與羅兵戰於槐谷西敗之 殺其將翊宗

“兵を派遣し、新羅の烽山城を攻めたが、克てなかった。”

十月 遣兵攻新羅烽山城 不克

“靺鞨長羅渴が良馬十匹を献じた。王は使者の労をねぎらい還した。”

二十五年 298, 258 春 靺鞨長羅渴獻良馬十匹 王優勞使者以還之

“内臣佐平を置き宣納の事を受け持たせた。内頭佐平は庫藏の事、内法佐平は禮儀の事、衛士佐平は宿衛兵の事 朝廷佐平は刑獄の事 兵官佐平は外兵馬の事を受け持たせた。また達率・恩率・徳率・・・を置いた。(さらに、品位との対応)”

二十七年 300, 260 正月 置内臣佐平掌宣納事 内頭佐平掌庫藏事 内法佐平掌禮儀事 衛士佐平掌宿衛兵事 朝廷佐平掌刑獄事 兵官佐平掌外兵馬事 又置達率・恩率・徳率・扞率・奈率及將徳・施徳・固徳・季徳・對徳・文

督・武督・佐軍・振武・克虞 六佐平並一品 達率二品 恩率三品 德率四品
扞率五品 奈率六品 將德七品 施德八品 固德九品 季德十品 對德十一品
文督十二品 武督十三品 佐軍十四品 振武十五品 克虞十六品

“三月 王弟の優壽を内臣佐平とした。”

以王弟優壽爲内臣佐平

上の官位制が滅亡まで続く。新羅では、儒理尼師今九年 199, 205, 30 設官
有十七等、法興王七年 520 正月 頒示律令、倭(日本)では、聖徳太子の冠位
十二階 604

“二十八年 301, 261 二月 眞可を内頭佐平に、優豆を内法佐平に、高壽を衛
士佐平に昆奴を朝廷佐平に惟己を兵官佐平にした。”

拜眞可

爲内頭佐平 優豆爲内法佐平 高壽爲衛士佐平 昆奴爲朝廷佐平 惟己 爲兵官佐平

“三月 新羅に請和の使いを送ったが受け入れられなかった。”

遣使新羅請和 不從

“二十九年正月 官人で財を盗むものは、三倍を徴収し、終身禁錮とする
ことを定めた。”

下令 凡官人受財及盜者 三倍徵贓 禁錮終身

“三十三年 306, 266 八月 兵を遣り新羅の烽山城を攻めた。壯士二百人を率
いて出撃した城主の直宣率に敗れた。”

遣兵攻新羅烽山城 城主直宣率壯士二百人 出擊敗之

“三十九年 312, 272 十一月 兵を遣り新羅を侵した。”

遣兵侵新羅

“四十五年 318, 278 十月 兵を出し新羅を攻め、槐谷城を囲んだ。”

“五十年 323, 283 九月 兵を遣り新羅の邊境を侵した。” 遣兵侵新羅邊境

“五十三年 326, 286 正月 新羅に請和の使いを送った。” 遣使新羅請和

“十一月 王は薨じた。” 王薨

ここまでの記事は新羅との抗争とあいまいに靺鞨の記事である。ここで、馬韓を制圧したのか。馬韓制圧の記事がないのは、古くから支配していたことに反するから削除したとも考えられる。

晋書では 武帝太康元年 280 二年 281 其主頻遣使入貢方物

上で、其主は馬韓の主。百濟本紀に記事が無いのは、別の王朝と思われる。

すなわち、この時期はまだ馬韓は存在していた。

(馬韓の東部で靺鞨が侵入可能で樂浪郡も侵入可能な地と馬韓の南部夫餘・公州辺りに 2 国があり、これらが統合した。)

七年 286 八年 287 十年 289 又頻至

この辺りで何かが起きた。260 年の官位の制度は以後百濟で引き継がれている。帶方郡の滅亡は 313 年。

%% 上の多くは 7 章で取り挙げた

長期政権では 3 代目辺りで、政治システムの改変が行われる。

14.10. 第9代 C2 責稽王（青稽） 326-338, 286-298

%% A4, ,7342 百済 02

“二年 327,287 正月 東明廟にまみえた。”

謁東明廟

前王は十年に壇を設けて祈っていた。

“十三年 338,298 九月 漢と貊人が來侵した。王は出禦したが敵兵に害され
薨じた。”

漢與貊人來侵 王出禦爲敵兵所害薨

前文とこの2つの記事のみである。

14.11. 第10代 C3 汾西王 338-344, 298-304

%% A4, ,7359 百済 02

“二年 339, 299 正月 東明廟にまみえた。”

謁東明廟

“五年 342, 302 四月 晝に彗星を見た。”

彗星晝見

“七年 344, 304 二月 樂浪郡の西縣を襲い取った。”

潜師襲取樂浪西縣

“十月 王は樂浪太守の刺客に害され薨じた。” 王爲樂浪太守所遣刺客賊害薨

これが全ての記事である。

14.12. 第12代 C4 契王 344-346

% A4, ,7377 百済 02

“三年 346 九月 王は薨じた。”

王薨

のみである。

C2 から C4 までは非常に短い。記事を B にもっていったか。あるいは、この3王は無く、B 系統と D 系統の始めからは並列であったかもしれない。この場合、百済は100年程遅くなる。これは可能か？神功皇后紀とも関係する。神功と応神の間にも100年程のギャップがある。

D 系統

14.13. 第13代 近肖古王 346-375 句

%% A4, ,7401 百済 02

前文に 體貌奇偉 有遠識 とある。始祖か特別な王に書かれることが多い。

“二年 347 正月 天地神祇を祭った。”

祭天地神祇

祭天地神祇は即位の儀式であろう。他の王にもあるが以下略。(check 系統で同じか異なるか) 新羅では親祀始祖廟から親祀神宮に替わった。(祖廟が神宮になった) 日本では伊勢神宮に即位の報告に行くことに対応しているのでは。あるいは、中国の天壇に参るのも同様か。北方系の風習の気がする。百済・新羅・日本の共通の事か。

三年から二十年までの18年間は記事なし。

“二十一年 366 三月 新羅に進物の使いを送った。”

遣使聘新羅

“二十三年 368 三月 新羅使いを遣る。良馬二匹を送った。”

遣使新羅 送良馬二匹

“二十四年 369 九月 高句麗王の斯由は歩騎二萬で雉壤に駐屯した。兵を分けて民戸を侵奪した。王は太子に兵を率いて雉壤送り、急撃破した。五千餘級を獲り、其虜獲したものは將士に賜うた。”

高句麗王斯由帥歩騎二萬 來屯雉壤 分兵侵奪民戸 王遣太子以兵徑至雉壤 急撃破之 獲五千餘級 其虜獲分賜將士

“二十六年 371 高句麗軍が攻めてきた。王はこれを聞き、兵を於?河に伏せ、撃退した。この年、王と太子は精兵三萬を率い、高句麗を侵し、平壤城を攻めた。高句麗王斯由は迎え撃ってが、流矢に当り死んだ。王は軍をひき、漢山に都を移した。”

高句麗舉兵來 王聞之 伏兵於湏河上 俟其至急撃之 高句麗兵敗北 冬 王與太子帥精兵三萬 侵高句麗 攻平壤城 麗王斯由力戰拒之 中流矢死 王引軍退 移都漢山

“二十七年 372 正月 晋に使いを派遣し朝貢した。” 遣使入晉朝貢
晋書の次の記事が対応する。

咸安二年 372 正月 遣使拜百濟王餘句爲鎮東將軍 領樂浪太守

六月 遣使拜百濟王餘句爲鎮東將軍

“二十八年 373 二月 晋に使いを派遣し朝貢した。” 遣使入晉朝貢

“七月 青木嶺に城を築く。禿山城主が三百人を率いて新羅へ奔る。”

築城於青木嶺 禿山城主率三百人奔新羅

“三十年 375 七月 高句麗が北鄙に攻め入って、水谷城を陥れた。王は將

を派遣し拒んだが克てなかった。さらに、将と大兵で報いた。この年は、荒れて収穫できなかった。”

高句麗來攻北鄙水谷城陷之 王遣將拒之 不克 王又將大舉兵報之 以年荒不果

“十一月 王は薨じた。”

王薨

正史(晋書)で始めて名前のでる王。晋書には、馬韓の記事もある。この後、第31代の義慈王までの19王中12王が対応している。この朝貢は楽浪郡と帯方郡は無くなっているため、直接晋の都に行くか、遼東郡に行くかのどちらかであるが前者と思われる。これも東夷伝ではなく本紀に書かれた原因の1つではないか。

百濟本紀には餘句が書かれていない。諱も書かれていない。高句麗本紀・新羅本紀(・日本書紀?)には書かれている。

対馬海峡を渡ることができれば、馬韓から山東半島へ直接航海することは容易と思われるが、分からない。倭の五王の上奏文からは400年頃は高句麗が邪魔をして朝貢が困難となったということが書かれている。これは言い訳か。

14.14. 第14代 近仇首王 375-384 須

% A4, , 7458 百濟 02

前文は少し長い。一云諱須 と書かれたあとに、次が書かれている。

“(訳)”

先是 高句麗國岡王斯由 親來侵 近肖古王遣太子拒之 至半乞壤將戰 高句麗人斯紀
本百濟人 誤傷國馬蹄 懼罪奔於彼 至是還來 告太子曰 彼師雖多 皆備數疑兵而已
其驍勇唯赤旗 若先破之 其餘不攻自潰 太子從之 進擊大敗之 追奔逐北 至於水谷城
之西北 將軍莫古解諫曰 嘗聞道家之言 知足不辱 知止不殆 今所得多矣 何必求多
太子善之止焉 乃積石爲表 登其上 顧左右曰 今日之後 疇克再至於此乎 其地有巖石
罅若馬蹄者 他人至今 呼爲太子馬迹 近肖古在位三十年薨 即位

“二年 376 王の舅の眞高道を内臣佐平とし、政事を委ねる。”

以王舅眞高道爲内臣佐平 委以政事

“十一月 高句麗が來侵した。”

高句麗來侵北鄙

“三年 377 十月王は將兵三萬で高句麗の平壤城を攻めた。”

王將兵三萬 侵高句麗平壤城

“十一月 高句麗が來侵した。”

高句麗來侵

“五年 379 三月 晉に使いを派遣した。海上で惡風に合い、行くことが出
来ず還った。”

遣使朝晉 其使海上遇惡風 不達而還

“十年 384 四月 王は薨じた。”

王薨

“”

14.15. 第15代 枕流王 384-385

% A4, ,7489 百済 02

“元年 384 七月 晉に使いを送り朝貢した。”

遣使入晉朝貢

“九月 胡僧の摩羅難陀が晋より来た。王は宮内に迎え、敬った。これが
仏法の始めである。” 胡僧摩羅難陀自晉至 王迎之致宮内 禮敬焉 佛法始於此
百済への仏伝。

“二年 385 漢山に仏寺を創建した。”

創佛寺於漢山 度僧十人

“王は薨じた。”

十一月 王薨

上記に、近仇首王之元子 母曰阿余夫人 繼父即位 を加えたものが、記
事の全てである。

26.16. 第16代 辰斯王 385-392

%% A4, ,7498 百済 03

“・・・枕流が薨じたとき、太子は年少で、叔父の辰斯が即位した。”

爲人強勇聰惠 多智略 枕流之薨也 太子少 故叔父辰斯即位

(古尔王と似ている)

“二年 386 八月 高句麗が來侵した。”

高句麗來侵

“三年 387 正月 眞嘉謨を達率に豆知を恩率とした。”

拜眞嘉謨爲達率 豆知爲恩率

“九月 靺鞨と關彌嶺で戦うが勝てず。”

與靺鞨戰關彌嶺不捷

“五年 389 九月 王は兵を派遣し、高句麗南鄙を侵掠した。”

王遣兵侵掠高句麗南鄙

“王は達率に眞嘉謨に命じ、高句麗を伐たせ、都坤城を抜き、二百人を虜にした 王は嘉謨を兵官佐平とした。

六年 390 九月 王命達率眞嘉謨 伐高句麗 拔都坤城 虜得二百人 王拜嘉謨爲兵官佐平

“七年 391 四月 靺鞨が攻めてきて、陷北鄙の赤峴城を陷しいれた。”

靺鞨攻陷北鄙赤峴城

“八年 392 七月 高句麗王の談徳兵四萬で北鄙に攻めてきた。陷石?等十餘

城を陥しいれた。王は談徳の用兵を聞き、拒むことができず、漢水の北の諸部落多数が落ちた。”

高句麗王談徳 帥兵

四萬 來攻北鄙 陷石?等峴十餘城 王聞談徳能用兵 不得出拒 漢水北諸部落多沒焉

“十月 高句麗は關彌城を攻め抜いた。．．．”

高句麗攻拔關彌城 王田於狗原 經旬不返

“十一月 狗原行宮で薨じた。”

薨於狗原行宮

高句麗王談徳は廣開土王で、在位は 391 年から 412 年である。

14.17. 第17代 阿莘王 392-405 或云阿芳

% A4, ,7498 百濟 03

“二年 393 正月 東明廟にまみえ、南壇で天地を祭る。眞武を左將と為し、
兵馬を委ねる。．．．”

謁東明廟

又祭天地於南壇 拜眞武爲左將 委以兵馬事 武王之親舅 沈毅有大略 時人服之

“三年 394 七月 高句麗と水谷城下で戦い、敗れた。”

與高句麗戰於水谷城下 敗績

“四年 395 八月 王は左將眞武等に命じて高句麗を伐とうとしたが、麗王
談徳は自ら兵七千を率いて湨水之上に陣を敷き戦いをいどんだ。我が軍は
大敗した。”

王命左將

眞武等 伐高句麗 麗王談徳 親帥兵七千 陣於湨水之上拒戰 我軍大敗 死者八千人

“十一月 王湨水之役の報復として、自ら兵七千人を率いて、漢水を過ぎ、
青木嶺下で大雪にあい、士卒の多くが凍死したので、漢山城に回った。”

王欲報湨水之役 親帥兵七千人 過漢水 次於青木嶺下 會大雪 士卒多凍死 廻軍至
漢山城 勞軍士

“六年 397 五月 王は倭國と結好し、太子の腆支を質とした。”

王與倭國結好 以太子腆支爲質

百濟本紀での倭の初出。高句麗に負け、倭に援助を求めたのか。

“七年 398 二月 眞武を兵官佐平に沙豆を左將とした。”

以眞武爲兵官佐平 沙豆爲左將

“三月 雙峴城を築いた。”

築雙峴城

“八月 王は高句麗を伐つために、漢山の北柵に着いた夜、大星が營中に落ちた。これを凶として遠征をとり止めた。”

王將伐高句麗 出師至漢山北柵 其夜 大星落營中有聲 王深惡之 乃止

“八年 399 八月 王は高句麗を侵そうとして兵馬を多く徴した。このため民は苦しみ多くが新羅に奔走し、戸口が減衰した。”

王欲侵高句麗 大徴兵馬 民苦於役 多奔新羅 戸口衰減

“十一年 402 五月倭國に使いを送り、大珠を求めた。”

遣使倭國求大珠

“十二 403 二月 倭國の使者が来た。”

倭國使者至 王迎勞之特厚

“七月 兵を派遣し、新羅の邊境を侵した。”

遣兵侵新羅邊境

“十四年 405 九月 王は薨じた。”

王薨

ここまで、崩でなく薨が用いられている。(check)

14.18. 第18代 腆支王 405-420 或云直支 梁書名映

% A4, ,7569 百濟 03

“・・・王仲弟の訓解が攝政となり、太子の帰国を待った。季弟の磔禮が訓解を殺し、自ら王となった。倭にいた腆支は訃報を聞き、哭泣し帰国を請うた。倭王は兵士百人で衛送した。國界到達したとき、漢城の人解忠が来て状況を告げた後、太子に輕備で国に入らないように要請した。腆支は倭人を留めて自衛し、海島で待つことにした。国人が 磔禮を殺し、腆支は即位した。・・・”

阿莘在位第三年 立爲太子 六年 出質於倭國 十四年 王薨 王仲弟訓解攝政 以待太子還國 季弟磔禮殺訓解 自立爲王 腆支在倭聞訃 哭泣請歸 倭王以兵士百人衛送 既至國界 漢城人解忠來告曰 大王棄世 王弟磔禮殺兄自王 願太子無輕入 腆支留倭人自衛 依海島以待之 國人殺磔禮 迎腆支即位 妃八須夫人 生子久余辛

“二年 406 正月 東明廟にまみえた。南壇で天地を祭った。”

王謁東明廟 祭天地於南壇

“二月 晋に使いを派遣し、朝貢した。”

遣使入晉朝貢

“九月 解忠を達率とし、漢城の租一千石を与えた。”

以解忠爲達率 賜漢城租一千石

“三年 407 二月 庶弟の餘信を内臣佐平、解須を内法佐平、解丘を兵官佐

平とした。皆、王族である。”

拜庶弟餘信爲内臣佐平 解須爲内法佐平 解丘爲兵官佐平 皆王戚也

餘姓の初出(とばした文は?)。解は王族の姓であるようだ。温祚王四十一年に北部解婁があった。

“四年 408 正月 餘信を上佐平とし軍国政の事を委ねた。上佐平の職はここに始まる。今の冢宰のようなものである。”

拜餘信爲上佐平 委以軍國政事 上佐平之職 始於此 若今之冢宰

“五年 409 倭國が使いを送り、夜明珠を贈った。”

倭國遣使 送夜明珠 王優禮待之

“十二年 416 東晉の安帝は使いを送り、王を使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王に冊封した。”

東晉安帝遣使 冊命王爲使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王

“十三年 417 七月 東北二部の年十五以上の人を徴集して、沙口城を築いた。兵官佐平解丘に監役させた。”

徴東北二部人年十五已上 築沙口城 使兵官佐平解丘監役

“十四年 418 夏 倭国に使いを派遣し、白綿十匹を送った。”

遣使倭國 送白綿十匹

“十六年 420 三月 王は薨じた。”

王薨

義熙十二年 416 以百濟王餘映為使持節 都督百濟諸軍事 鎮東將軍 百濟王

高祖永初二年 421 詔曰 倭讚萬里修貢 遠誠宜甄 可賜除授

倭の記事が複数あるのは、阿莘王と腆支王のみである。このときの、倭はどこか？

14.19. 第19代 久尔辛王 420-427

%% A4, ,7616 百済 03

“八年 427 十二月 王は薨じた。”

王薨

他の記事は無い。ないのか、書きたくないのか。

14.20. 第20代 毗有王 427-455

% A4, ,7626 百濟 03

“二年 428 二月 王は四部を巡撫した。倭國の使いが来た。従者は五十人。”

巡撫四部 賜貧乏穀有差 倭國使至 従者五十人

“三年 429 秋 使いを派遣し、宋に朝貢した。” 遣使入宋朝貢

“十月上佐平餘信が卒した。解須を上佐平とした。”

上佐平餘信卒 以解須爲上佐平

“四年 430 四月 宋の文皇帝はふたたび職貢を修め、使いを送り、先王映の爵號を授けた。” 宋文皇帝 以王復修職貢 降使冊授先王映爵號

“十二年 東晋は使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王に封じた。”

東晋冊命 爲使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王

“七年 433 七月 新羅に請和の使いを送った。” 遣使入新羅請和

“八年 434 二月 新羅に使いを送り、良馬二匹を贈った。”

遣使新羅 送良馬二匹

“九月 白鷹を贈った。” 又送白鷹

“十月 新羅は良金・明珠をお返しとした。” 新羅報聘以良金・明珠

“十四年 440 十月 使いを派遣し宗に朝貢した。” 遣使入宋朝貢

“二十一年 447 七月 旱で穀が熟さず、民は饑えた。多数の者が新羅に流出した。” 旱 穀不熟 民饑 流入新羅者多

“二十九年 455 三月 王は漢山で獵をした。”

王獵於漢山

“九月 漢江で黒龍を見た。雲霧を曳き、晦冥に飛び去った。”

黒龍見漢江 須臾雲霧晦冥飛去

“王は薨じた。”

王薨

時候の記事を除けば、上が記事のほぼ全てである。

14.21. 第21代 蓋鹵王 455-475 或云近蓋婁 諱慶司

% A4, ,7661 百濟 03

十三年までは記事なし。

或云近蓋婁 に意味があるのか。

“十五年 469 八月 將を遣わし高句麗南鄙を侵す。” 遣將侵高句麗南鄙

“十月 雙峴城を葺く。青木嶺に大柵を設ける。北漢山城士卒を分けて、
ここを守らせた。” 葺雙峴城 設大柵於青木嶺 分北漢山城士卒戍之

“十八年 472 魏に使いを派遣し、奏上した： 臣と高句麗は本は扶餘の出
である。（後は理解していない、かなりの長文、恐らく、高句麗を訴える。） “

遣使朝魏 上表曰：・・・臣與高句麗 源出扶餘 先世之時 篤崇舊款 其祖釗輕廢鄰好
親率士衆 凌踐臣境 臣祖須 整旅電邁 應機馳擊 矢石暫交 梟斬釗首 自爾已來 莫敢
南顧 自馮氏數終 餘燼奔竄 醜類漸盛 遂見凌逼 構怨連禍 三十餘載 財殫力竭・・・

“二十一年 475 九月 高句麗王巨璉は兵三萬で王都漢城を囲んだ。（この後
は理解していない） ”

麗王巨璉 帥兵三萬 來圍王都漢城・・・麗王巨璉 帥兵三萬 來圍王都漢城 王閉城
門 不能出戰 麗人分兵爲四道夾攻 又乘風縱火 焚燒城門 人心危懼 或有欲出降者王
窘不知所圖 領數十騎 出門西走 麗人追而害之 先是 高句麗長壽王 陰謀百濟 求可
以間諜於彼者・・・

Wikipedia「百濟」からは、

475 年にはかえって都・漢城を落とされ、蓋鹵王が戦死した。新羅に滞在していて難を逃れた文周王は都を熊津(現・忠清南道公州市)に遷した。

死亡記事が見つからない。略した長文にあるのか。

14.22. 第 22 代 文周王 475-477

% A4 , 7695 百濟 04

“毗有王が薨じ、蓋鹵が継いだ、文周はこれをたすけ、上佐平になった。蓋鹵王二十一年に、高句麗が侵入し、漢城を囲んだ。蓋鹵王は城に立て籠もり守りを固め、文周に新羅に救援を求めさせた。一万の兵を得た。麗兵は退ぞいたが、城は破れ、王は死んだ。即位した。熊津に遷都した。”

初毗有王薨 蓋鹵嗣位 文周輔之 位至上佐平 蓋鹵在位二十一年 高句麗來侵圍漢城 蓋鹵嬰城自固 使文周求救於新羅 得兵一萬 麗兵雖退 城破王死 遂即位 性柔不斷 而亦愛民 百姓愛之 冬十月 移都於熊津

“二年 476 二月 大豆山城を修葺し、漢北の民戸を移した。”

修葺大豆山城 移漢北民戸

“三月 宋に使いを派遣した。高句麗が路を塞ぎ、行くことが出来ず、還った。”

遣使朝宋 高句麗塞路 不達而還

“四月 耽羅國が方物を献じた。王は喜び、使者に恩率を授けた。”

耽羅國獻方物 王喜 拜使者爲恩率

“八月 解仇を兵官佐平とした。”

拜解仇爲兵官佐平

“三年 477 二月 宮室を修復した。”

重修宮室

“四月 王弟の昆支を内臣佐平とし、長子の三斤を太子とした。”

拜王弟昆支爲内臣佐平 封長子三斤爲太子

“四年 478 八月 兵官佐平の解仇は、権力をにぎり法を乱した。王を無視したが、王は制することが出来なかった。”

兵官佐平解仇 擅權亂法 有無君之心 王不能制

“九月 王は獵に出、郊外で宿泊した。解仇は盜人に襲わせた。ついに薨じた。”

王出獵 宿於外 解仇使盜害之 遂薨

ほぼ記事の全てである。

Wikipedia「昆支王」

日本書紀によると、雄略天皇 5 年 461 4 月、兄の加須利君(蓋鹵王)により日本に遣わされた。その際、蓋鹵王の夫人を一人賜り、身籠っていたその夫人が 6 月に筑紫の各羅嶋(加唐島)で男児を産んだ。この男児は嶋君(斯麻)と名付けられて、母子ともに百済に送り返され、後の武寧王となった。7 月宮廷に入ったが、この時既に 5 人の子があった。雄略天皇 23 年 479 4 月、百済の文斤王(三斤王)が急死したため、昆支王の 5 人の子供のなかで、第 2 子の末多王が幼少ながら聡明だったので、天皇は筑紫の軍士 500 人を付けて末多王を百済に帰国させ、王位につけた。これが東城王である、という。

新撰姓氏録では、飛鳥戸氏の祖とされ、大阪府羽曳野市の飛鳥戸神社に祭神として祀られている。三国史記の 百済本紀文周王には、文周王 3 年 4774 月に、王の弟の昆

支を拝し内臣佐平と為す、とあるが、同年7月に、内臣佐平の昆支卒す、とある。

また、宋書百濟伝に、百濟王余慶(蓋鹵王)が大明2年458に宋に上表文を提出し、百濟の將軍11名が宋から將軍号を認められているが、その中の征虜將軍の号を受けた左賢王余昆を、昆支王と同一人物とする説もある。

関連する遺跡として、高井田山古墳(大阪府柏原市)では初期横穴式石室の採用や武寧王陵出土例に似る火熨斗の出土が認められることから、5世紀後半頃の王族級百濟系渡来人の墓と推定されており、昆支が日本で死去したとすればその墓とする説が挙げられている。

紀に文斤王の記述がある。

百濟が親高句麗派と親倭派に分かれたのではないか。

14.23. 第23代 三斤王 477-479 或云壬乞

%% A4 , 7723 百済 04

“十三歳で即位した。軍国政事一切を佐平の解仇に委ねた。”

繼位 年十三歳 軍國政事一切委於佐平解仇

“二年 478 春 佐平の解仇と恩率の燕信は衆を集め、大豆城で叛いた。王は佐平の眞男に兵二千でこれを討つように命じたが、克てなかった。さらに、徳率に眞老に精兵五百を率いさせ、解仇を撃殺した。燕信は高句麗に奔走したが、その妻子をとらえ、熊津市で斬った。”

佐平解仇與恩率燕信聚衆 據大豆城叛 王命佐平眞男以兵二千討之 不克 更命徳率眞老 帥精兵五百 撃殺解仇 燕信奔高句麗 收其妻子 斬於熊津市

“三年 479 十一月 王は薨じた。”

王薨

対外記事無し。

論曰を除けば、ほぼ全ての記事である。

14.24. 第24代 東城王 479-501 諱 牟大 或作摩牟

%% A4 , 7743 百濟 04

“四年 482 正月 眞老を兵官佐平とし、内外兵馬の事を知らしめた。”

拜眞老爲兵官佐平 兼知内外兵馬事

“九月 靺鞨が漢山城襲破を襲破し、三百戸余りを虜にして歸った。”

靺鞨襲破漢山城 虜三百餘戸以歸

“五年 483 春 王は獵に出、漢山城についた。軍民を撫問し、1 旬の後還った。”

王以獵出 至漢山城 撫問軍民 浹旬乃還

“四月 熊津の北で獵をし、神鹿を捕えた。”

獵於熊津北 獲神鹿

“六年 484 二月 王は、高句麗の巨璉が、使いを派遣し驃騎大將軍位を上奏して請い、南齊の祖道成はこれを許した、と聞いた。”

王聞南齊祖道成 冊高句麗巨璉爲驃騎大將軍 遣使上表請内屬 許之

“七月 内法佐平の沙若思を派遣し、南齊に朝貢しようとしたが、西海についたとき、高句麗兵に遇い進めなかった。”

遣内法佐平沙若思 如南齊朝貢 若思至西海中 遇高句麗兵 不進

“七年 485 五月 新羅に招聘の使いを派遣した。”

遣使聘新羅

“八年 486 二月 苜加を衛士佐平とした。”

拜苜加爲衛士佐平

“三月 使いを派遣し、南齊に朝貢した。”

遣使南齊朝貢

“七月 宮室を修復し、牛頭城を築いた。”

重修宮室 築牛頭城

“十年 488 魏が兵を派遣し打とうとしたが、これを破った。”

魏遣兵來伐 爲我所敗

“十一年 489 十月 王は壇を設け、天地を祭った。”

王設壇祭天地

“十一月 南堂で群臣饗宴した。”

宴羣臣於南堂

“十二年 490 七月 北部の 15 歳以上の人を徴集し、沙峴と耳山の二城を築いた。”

徴北部人年十五歳已上 築沙 峴耳山二城

“九月 国西の泗泚原を耕した。燕突えお達率とした。”

王田於國西泗泚原 拜燕突爲達率

“十三年 491 六月 熊川の水があふれ、王都の二百家余りが漂没した。”

熊川水漲 漂没王都二百餘家

“七月 民は饑え、新羅に逃亡するものが六百家を越えた。”

民饑 亡入新羅者 六百餘家

“十五年 493 三月 王は新羅に使いを遣り、婚訳を要請した。新羅王は伊淦の比智の女をよこした。”

王遣使新羅請婚 羅王以伊淦比智女 歸之

“十六年 494 七月 高句麗と新羅が薩水之原で戦ったが、新羅は勝てず、犬牙城に退いた。高句麗はこれを囲んだが、王は兵三千を派遣し囲みを解いた。”

高句麗與新羅戰薩水之原 新羅不克 退保犬牙城 高句麗圍之 王遣兵三千救 解圍

“十七年 495 八月 高句麗が雉壤城を囲んだ。王は新羅に救援を要請し、新羅王は將軍徳智に命じ救援し、高句麗兵は退いた。”

高句麗來圍雉壤城 王遣使新羅請救 羅王命將軍德智 帥兵救之 麗兵退歸

“十九年 495 五月 兵官佐平の眞老が卒した。達率の燕突を兵官佐平とした”。

兵官佐平眞老卒 拜達率燕突爲兵官佐平

“二十年 498 熊津橋を架けた。七月 沙井城を築き、扞率の毗陁に鎮めさせた。”

設熊津橋 七月 築沙井城 以扞率毗陁鎮之

“八月 王は耽羅が貢賦を行わないため、親征をし武珍州に進めた。耽羅はこれを聞き、謝罪の使いをよこしたので、王は取り止めた。”

王以耽羅不修貢賦 親征至武珍州 耽羅聞之 遣使乞罪 乃止 耽羅 牟耽牟羅

“二十三年 501 至十二月 薨じた。諡を東城王とした。” 薨 諡曰東城王

“(訳)”

冊府元龜云 . . .

14.25. 第 25 代 武寧王 502-523 諱 斯摩 隆

%% A4 , 7743 百濟 04

元年正月 佐平苜加據加林城叛 王帥兵馬 至牛頭城 命扞率解明討之 苜加
出降 王斬之 投於白江

佐平苜加が加林城にたてこもり叛いた。王は兵馬を率いて、牛頭城に到着し、扞
率の解明命じてこれを討った。苜加は降伏したが、王はこれを斬り、白江に投じた。

“二年 503 十一月 兵を派遣し高句麗の邊境を侵した。” 遣兵侵高句麗邊境

“三年 504 九月 靺鞨が馬首柵を焼き高木城に侵攻した。王は兵五千を派
遣し、これを撃退した。” 靺鞨焼馬首柵 進攻高木城 王遣兵五千 撃退之

靺鞨とは高木城辺りで接しているのか。

“六年 507 七月 靺鞨が來侵し、高木城を破り、虜六百人余りを殺した。”

靺鞨來侵 破高木城 殺虜六百餘人

“七年 508 五月 高木城の南に二柵を立てた。また、長嶺城を築き、靺鞨に
備えた。” 立二柵於高木城南 又築長嶺城 以備靺鞨

“十月 高句麗の將高老は靺鞨漢城を攻めようとして、横岳下に進屯した。
王は出師しこれを戦退した。”

高句麗將高老 與靺鞨謀欲攻漢城 進屯於横岳下 王出師 戦退之

“十二年 513 四月 使いを派遣し梁に朝貢した。” 遣使入梁朝貢

“九月 高句麗が襲取加弗城を襲い取とり、圓山城に兵を移し、民衆を甚しく殺掠した。王は勇騎三千で葦川之北で戦った。ここで高句麗人は王軍の少ないのを見て、易く見陣を設けなかった。王は奇急をかけ、大破した。”

高句麗襲取加弗城 移兵破圓山城 殺掠甚衆 王帥勇騎三千 戰於葦川之北 麗人見王軍少 易之不設陣 王出奇急擊 大破之

“二十一年 522 八月 蝗害がおき、民は飢えた。900 戸が新羅の逃亡した。”

蝗害穀 民饑 亡入新羅者九百戸

“十一月 使いを派遣し梁に朝貢した。高句麗に破れた後暫く衰弱していたが、ここにいたって、朝貢でき、高句麗を破った。．．．” 遣使入梁朝貢 先是爲高句麗所破 衰弱累年 至是上表 稱累破高句麗 始與通好 而更爲強國

“(訳) 十二月 高祖は．．．。”(理解できていない)

高祖詔冊王曰 行都督百濟諸軍事鎮東大將軍百濟王餘隆 守藩海外 遠修貢職 迺誠款到 朕有嘉焉 宜率舊章 授茲榮命 可使持節都督百濟諸軍事寧東大將軍

寧東大將軍は 10.1 節(20.1 節に)で調べた將軍位に入っていない。

“二十三年 524 二月 王は漢城に幸じた。佐平の因友と達率の沙烏らに命じて、漢北州の 15 歳以上の郡民を徴集し、雙峴城を築いた。”

王幸漢城 命佐平因友・達率沙烏等 徵漢北州郡民年十五歳已上 築雙峴城

“三月 漢城より戻った。”

至自漢城

“五月 王は薨じた。”

王薨 諡曰武寧

武寧王陵は公州市にある。靺鞨來侵は可能か。鎮東<寧東 か。

14.26. 第26代 聖王 523-554 諱 明禮（明）

% A4 , 7840 百濟 04

“元年 523 八月 高句麗兵が?水にきた。王は左將志忠に命じ、一萬を率いて撃退することを命じた。”

高句麗兵至湞水 王命左將志忠 帥歩騎一萬 出戰退之

“二年 524 梁の高祖は、王を持節都督百濟諸軍事綏東將軍百濟王に封じた。”

梁高祖詔 冊王爲持節都督百濟諸軍事綏東將軍百濟王

“三年 525 二月 新羅と交聘した。” 與新羅交聘

“四年 526 十月 熊津城を葺き替え、沙井柵を立てた。” 修葺熊津城 立沙井柵

“七年 529 十月 高句麗王の興安は兵馬を率いて來侵し、北鄙穴城を抜いた。佐平の燕謨に歩騎三萬を与え、五谷之原で迎え撃ったが、勝てずに死者二千余人をだした。”

高句麗王興安 躬帥兵馬來侵

拔北鄙穴城 命佐平燕謨 領歩騎三萬 拒戰於五谷之原 不克 死者二千餘人

“十二年 534 三月 使いを派遣し梁に朝貢した。” 使入梁朝貢

“十六年 538 春 泗泚に遷都した。夫里ともいい、国号は南夫余。”

移都於泗泚 一名所夫里 國號南夫餘

前の都は熊津(忠清南道公州市)。

“十八年 540 九月 王は將軍燕會に命じ高句麗の牛山城を攻めさせたが、

勝てなかった。”

王命將軍燕會 攻高句麗牛山城 不克

“十九年 541 使いを派遣し梁に朝貢した。毛詩博士、涅槃などの經義と工匠・畫師を要請した。”

王遣使入梁朝貢 畫兼表請毛詩博士・涅槃等經義并工匠・畫師等 從之

“二十六年 548 正月 高句麗王の平成と穢は漢北の獨山城を攻めてきた。王は新羅に救援を要請する使いを送った。新羅王は將軍朱珍に命じ、甲卒三千を率いて向かわせた 朱珍は昼夜兼行で獨山城下に至り、高句麗兵と戦い大破した。”

高句麗王平成 與?謀 攻漢北獨山城 王遣使請救於新羅

羅王命將軍朱珍 領甲卒三千發之 朱珍日夜兼程 至獨山城下 與麗兵一戰 大破之

“二十七年 549 十月 梁の都に寇賊がいることを知らずに、使いを派遣し朝貢した。”

王不知梁京師有寇賊 遣使朝貢

“二十八年 550 正月 王は將軍達已と領兵一萬を派遣し、高句麗の道薩城を攻め取った。”

王遣將軍達已 領兵一萬 攻取高句麗道薩城

“三月 高句麗兵が金峴城を囲む。”

高句麗兵圍金峴城

“三十一年 553 七月 新羅が東北鄙を取り、新州を置いた。”

新羅取東北鄙 置新州

“十月 王女が新羅から歸った。”

王女歸于新羅

“三十二年 554 七月 王は新羅を襲おうと、自ら騎五十を率いて狗川に至り、新羅の伏兵と戦い、薨じた。”

王欲襲新羅 親帥步騎五十 夜至狗川 新羅伏兵發與戰 爲亂兵所害薨

14.27. 第 27 代 威徳王 554-598 諱 昌

%% A4 ,7840 百済 05

“元年 554 十月 高句麗兵が大挙して熊川城を攻めてきた。”

高句麗大舉兵 來攻熊川城

“八年 561 七月 兵を派遣し、新羅の邊境を侵掠した。出撃した新羅兵に敗れ、一千人余りが戦死した。” 遣兵侵掠新羅邊境 羅兵出擊敗之 死者一千餘人

“十四年 567 九月 使いを派遣し陳に朝貢した。” 遣使入陳朝貢

“十七年 570 高齊の後主は王を使持節侍中車騎大將軍帶方郡公百済王に封じた。” 高齊後主 拜王爲使持節侍中車騎大將軍帶方郡公百済王

“十八年 571 高齊の後主は王を使持節都督東青州諸軍事東青州刺史に任じた。” 高齊後主 又以王爲使持節都督東青州諸軍事東青州刺史

高齊は北朝の北齊で、後主は、5 代皇帝。

高句麗も同じであるが王の他に郡公に任じられている。

州は郡の上。

“十九年 572 使いを派遣し齊に朝貢した。” 遣使入齊朝貢

“二十四年 577 七月 使いを派遣し陳に朝貢した。” 遣使入陳朝貢

“十月 新羅西邊州郡を侵したが、新羅の伊?世宗に撃破された。”

侵新羅西邊州郡 新羅伊?世宗 帥兵撃破之

“十一月 使いを派遣し宇文周に朝貢した。”

遣使入宇文周朝貢

“二十五年 578 使いを派遣し宇文周に朝貢した。”

遣使入宇文周朝貢

“二十八年 581 使いを派遣し隋に朝貢した。隋の高祖は王を上開府儀同三司帶方郡公に封じた。”

王遣使入隋朝貢 隋高祖詔 拜王爲上開府儀同三司帶方郡公

開府儀同三司は倭の五王が求めて認められなかった。

“二十九年 582 正月 使いを派遣し隋に朝貢した。”

遣使入隋朝貢

“三十一年 584 十一月 使いを派遣し陳に朝貢した。”

遣使入陳朝貢

“三十三年 586 使いを派遣し陳に朝貢した。”

遣使入陳朝貢

隋と陳に朝貢している。二股朝貢である。

“三十六年 589 隋の平陳の時、一戦船が至耽牟羅國に漂着した。”

隋平陳 有一戦船 漂至耽牟羅國

“四十五年 598 九月 王は長史の王辯那を使わせて、隋に朝獻した。王は隋と遼東の役を聞いたので、使いを派遣し、軍道となることを請うた。帝はいった：……。高句麗はこのことを聞き、国境を侵した。”

王使長史王辯那 入隋朝獻 王聞隋興遼東之役 遣使奉表 請爲軍道 帝下詔曰 往歲高句麗不供職貢 無人臣禮 故命將討之 高元君臣恐懼 畏服歸罪 朕已赦之 不可致伐 厚我使者而還之 高句麗頗知其事 以兵侵掠國境

“十二月 王は薨じた。”

王薨 羣臣議諡曰威德

14.28. 第 28 代 恵王 598-599 諱 季

% A4 , 7943 百済 05

“二年 599 王は薨じた。”

王薨 諡曰恵

他の記事なし。

14.29. 第29代 法王 599-600 諱 宣 或云孝順

% A4 , 7941 百済 05

“二年 600 正月 王興寺を創建した。度僧は三十人である。王は漆岳寺で
祈雨した。”

創王興寺 度僧三十人 大旱 王幸漆岳寺祈雨

“五月（訳）”

薨 上諡曰法

他の記事なし。

14.30. 第30代 武王 600-641 諱 璋

%% A4 ,7956 百濟 05

“三年 602 八月 王は出兵し、新羅の阿莫山城(一名母山城)を囲んだ。新羅王眞平は精騎數千を派遣し応戦した。我兵は利なく帰ってきた。”

王出兵 圍新羅阿莫山城一名母山城 羅王眞平遣精騎數千拒戰之 我兵失利而還

“六年 605 二月 角山城を築いた。” 築角山城

“八月 新羅が東鄙を侵した。” 新羅侵東鄙

“八年 607 三月 扞率の燕文進を派遣し、隋に朝貢した。また、佐平の王孝隣を派遣して、入貢し高句麗を討つことを請うた。帝はこれを許し、高句麗の動静を探るように命じた。” 遣扞率燕文進

入隋朝貢 又遣佐平王孝隣入貢 兼請討高句麗 煬帝許之 令覘高句麗動靜

“五月 高句麗が松山城を來攻たが落とせず、石頭城を移襲し、男女三千を虜として帰った。” 高句麗來攻松山城不下 移襲石頭城 虜男女三千而歸

“九年 608 三月 使いを派遣し隋に朝貢した。隋の文林郎の裴清は倭国への使いを奉じ、我が国の南路を経た。”

遣使入隋朝貢 隋文林郎裴清奉使倭國 經我國南路

“十二年 611 二月 使いを派遣し隋に朝貢した。隋の煬帝は高句麗を征しようとした。王使の国智牟は軍期を請うた。帝は悦び厚く加賞した。尚書起部郎の席律を派遣した。” 遣使入隋朝貢 隋煬帝

將征高句麗 王使國智牟入請軍期 帝悅厚加賞錫 遣尚書起部郎席律 來與王相謀

“八月 赤岳城を築いた。”

築赤岳城

“十月 新羅の楸岑城を囲み、城主の讚德を殺し城を滅ぼした。”

圍新羅楸岑城 殺城主讚德 滅其城

“十三年 612 隋の六軍は遼河を渡った。．．．”

隋六軍度遼 王嚴兵於境 聲言助隋 實持兩端

“十七年 616 十月 達率の苜奇に命じて兵八千で新羅母山城を攻めさせた。”

命達率苜奇領兵八千 攻新羅母山城

“十九年 618 新羅の將軍邊品等が再び楸岑城を攻めてきた。”

新羅將軍邊品等 來攻楸岑城復之 奚論戰死

“二十二年 621 十月 使いを派遣し隋に朝貢した。馬を獻じた。”

遣使入唐 獻果下馬

“二十四年 623 秋 新羅の勒弩縣に兵を向けた。”

遣兵侵新羅勒弩縣

“二十五年 624 正月 大臣を唐に派遣し朝貢した。高祖は喜び、使いを派遣し、帶方郡王百濟王に封じた。”

遣大臣入唐朝貢 高祖嘉其誠款 遣使就冊爲帶方郡王百濟王

“七月 使いを派遣し隋に朝貢した。”

遣使入唐朝貢

“十月 新羅を攻め、速含・櫻岑・楸岑・烽岑・旗懸・冗柵等六城を取った。”

攻新羅速含・櫻岑・岐岑・烽岑・旗懸・冗柵等六城取之

“二十六年 625 十一月 使いを派遣し隋に朝貢した。”

遣使入唐朝貢

“二十七年 626 使いを派遣し唐に朝貢した。明光鎧を献じ、高句麗が道路をふさぎ、訪朝できないことを訴えた。高祖は散騎常侍の朱子奢を派遣し、．．．。”

遣使入唐 獻明光鎧 因訟高句麗梗道路 不許來朝上國 高祖遣散騎常侍朱子奢 來詔諭我及高句麗平其怨

“八月 兵を派遣し新羅王城を攻めた。執城主の所はこれを殺した。”

遣兵攻新羅王在城 執城主東所殺之

“十二月 使いを派遣し唐に朝貢した。”

遣使入唐朝貢

“二十八年 627 七月 王は將軍沙乞に命じて、新羅の西鄙二城を抜き男女三百口餘りを虜にした。さらに新羅が奪った地を回復しようと熊津に出陣した。新羅王眞平はこれを聞き、唐に使いを遣りこれを訴えた。王はこれを聞き出兵を取り止めた。”

王命將軍沙乞 拔新羅西鄙二城 虜男女三百餘口 王欲復新羅侵奪地分 大舉兵 出屯於熊津 羅王眞平聞之 遣使告急於唐 王聞之乃止

“秋八月 王の姪の福信を唐に派遣し、朝貢した。．．．”

遣王姪福信 入唐朝貢 太宗謂與新羅世讎 數相侵伐 賜王璽書曰．．．

“二十九年 628 二月 兵を派遣し、新羅?峯城を攻めたが、勝てずに還った。”

遣兵攻新羅椶峯城 不克而還

“三十年 629 九月 使いを派遣し唐に朝貢した。”

唐朝貢

“三十一年 630 二月 泗泚之王宮を修復した。王は熊津城に幸した。夏、旱

つがあり、泗泚之役を停止した。”

重修泗泚之宮 王幸熊津城 夏旱 停泗泚之役

“七月 王は熊津より還った。”

王至自熊津

“三十二年 631 九月 使いを派遣し唐に朝貢した。”

遣使入唐朝貢

“三十三年 632 七月 新羅を伐兵を發したが、うまくいかなかった。王は生草之原で田をはじめた。”

發兵伐新羅 不利 王田于生草之原

“十二月 使いを派遣し唐に朝貢した。”

遣使入唐朝貢

“三十四年 633 八月 將を派遣し、新羅西谷城を攻め、十三日でこれを抜いた。”

遣將攻新羅西谷城 十三日拔之

“三十五年 634 二月 王興寺が完成した。河に臨み壮麗な彩飾が施された。．．．”

王興寺成 其寺臨水 彩飾壯麗 王每乘舟 入寺行香

法王二年 600 正月 王興寺を創建した。

“三月 王宮に南に池を穿った。二十里余りの水路を引き、岸には楊柳を植えた。池の中に丈仙山を擬せた島を築いた。”

穿池於宮南 引水二十餘里 四岸植以楊柳 水中築島嶼 擬方丈仙山

扶余にある池か。Wikipedia「百濟」では

王興寺・定林寺・軍守里廢寺などの寺址が扶余郡で発見されていると書かれている。

“三十七年 636 二月 使いを派遣し唐に朝貢した。”

遣使入唐朝貢

“五月 王は將軍于召に命じ、甲士五百を率いて、新羅の獨山城を襲わせた。”
王命將軍于召 帥甲士五百 往襲新羅獨山城

“八月 群臣と望海樓で酒盛りをした。”
燕羣臣於望海樓

“唐三十八年 637 十二月 に使いを派遣し、鉄甲雕斧を献じた。太宗から
勞をねぎらい錦袍と彩帛三千段を賜った。”

遣使入唐 獻鐵甲雕斧 太宗優勞之 賜錦袍并彩帛三千段

“四十年 639 十月 唐に使いを派遣し、金甲雕斧を献じた。”

又遣使於唐 獻金甲雕斧

“四十一年 640 二月 子弟を唐に派遣し、国学に入ることを請うた。”

遣子弟於唐 請入國學

“四十二年 641 三月 王は薨じた。”

王薨 諡曰武

“(訳、できれば)”

使者入唐 素服奉表曰 君外臣扶餘璋卒 帝舉哀玄武門 詔曰 懷遠之道 莫先於寵命
飾終之義 無隔於遐方 故柱國帶方郡王百濟王扶餘璋 棧山航海 遠稟正朔 獻琛奉牘
克固始終 奄致薨殞 追深悼 宜加常數 式表哀榮 贈光祿大夫 賻賜甚厚

14.31. 第31代 義慈王 641-660

% A4 , 7956 百濟 06

“元年 641 太宗は祠部郎中の鄭文表を派遣し、柱國帶方郡王百濟王に封じた。”
太宗遣祠部郎中鄭文表 冊命爲柱國帶方郡王百濟王

“八月 唐に謝意を表し、方物を献じた。” 唐表謝 兼獻方物

“二年 642 正月 使いを派遣し唐に朝貢した。” 遣使入唐朝貢

“七月 王は自ら兵を率いて新羅を侵し、獼猴等四十餘城を下した。”

王親帥兵侵新羅 下獼猴等四十餘城

“八月 將軍允忠に兵一萬で新羅大耶城を攻めさせた。”

遣將軍允忠 領兵一萬攻新羅大耶城

“三年 643 正月 使いを派遣し唐に朝貢した。” 遣使入唐朝貢

“十一月 王は高句麗と和睦した。入朝の路を塞ぐため、新羅の黨項城を取ろうとし、兵を發した。新羅王德曼は唐に救援の要請をしたため、王兵をひいた。”
王與高句麗和親

謀欲取新羅黨項城 以塞入朝之路 遂發兵攻之 羅王德曼遣使請救於唐 王聞之罷兵

“四年 644 正月 使いを派遣し唐に朝貢した。太宗は司農丞相の里玄獎を派遣し、兩國を諭した。王は陳社の意を申し上げた。王子の隆を太子とし、大赦を行った。”

遣使入唐朝貢 太宗遣司農丞相里玄獎 告諭兩國 王奉表陳謝 立王子隆爲太子 大赦

“九月 新羅の將軍庚信は兵を率いて來侵し、七城を取った。”

新羅將軍庚信領兵來侵 取七城

“五年 645 五月 王は太宗が高句麗に親征するのを聞き、それに乗じて、兵を集め、新羅の七城を襲い取った。新羅は將軍庚信を派遣し來侵した。”

王聞太宗親征高句麗 徵兵新羅 乘其間 襲取新羅七城 新羅遣將軍庚信來侵

“七年 647 十月 將軍義直は帥歩騎三千で新羅茂山城下に進屯し、兵を分けて甘勿・桐岑の二城を攻めた。新羅將軍庚信は士卒を激励しこれを大破した。”

將軍義直帥歩騎三千 進屯新羅茂山城下

分兵攻甘勿・桐岑二城 新羅將軍庚信親勵士卒 決死而戰 大破之 義直匹馬而還

“八年 648 三月 義直は新羅西鄙の腰車等一十餘城を襲い取った。”

義直襲取新羅西鄙腰車等一十餘城

“四月 玉門谷に進軍したが、新羅將軍庚信に再び大敗した。”

進軍於玉門谷 新羅將軍庚信逆之 再戰大敗之

“九年 649 八月 王左將殷相と精兵七千を派遣し、新羅石吐等七城を攻め取った。新羅の將庚信・陳春・天存・竹旨等は反撃し、道薩城下で再び戦い、我が軍は敗北した。”

王遣左將殷相 帥精兵七千 攻取新羅石吐等七城

新羅將庚信・陳春・天存・竹旨等逆擊之 不利收散卒 屯於道薩城下再戰 我軍敗北

“十一年 651 使いを派遣し唐に朝貢した。使いが還り、携えた高宗の璽書では、次のように王を諭している。．．．”

遣使入唐朝貢 使還 高宗降璽書 諭王曰．．．

“十二年 652 正月 使いを派遣し唐に朝貢した。”

遣使入唐朝貢

“十三年 653 八月 王は倭國と通好した。”

王與倭國通好

“十五年 655 二月 太子宮を修復し、華やかなものとなった。王宮の南に望海亭を立てた。”

修太子宮極侈麗 立望海亭於王宮南

“五月 赤い馬が北岳の烏含寺に入った。仏殿で鳴いた。数日後に死んだ。”

驛馬入北岳烏含寺 鳴匝佛宇 數日死

“七月 馬川城を修復した。”

重修馬川城

“八月 王と高句麗・靺鞨は新羅三十餘城を攻め破った。新羅王金春秋は唐に朝貢し、百濟と高句麗・靺鞨が我が北界を侵し、三十餘城を取ったことを訴えた。”

王與高句麗・靺鞨攻破新羅

三十餘城 新羅王金春秋遣使朝唐 表稱 百濟與高句麗・靺鞨侵我北界 沒三十餘城

“十九年 659 四月 將を派遣し、新羅の獨山・桐岑二城攻めた。”

遣將侵攻新羅獨山・桐岑二城

“二十年 660 五月 暴風雨があり、天王・道讓二寺の塔と白石寺講堂が震え、雲が龍のように現れた。”

風雨暴至 震天王・道讓二寺塔 又震白石寺講堂 玄雲如龍 東西相鬪於空中

“六月 王興寺の衆僧は皆大水を漕いで寺門に入る船を見た。”

王興寺衆僧皆見 若有船 楫隨大水入寺門

この後凶事の記事が続き、唐に滅ぼされる長文の記事で終わる。

百濟本紀はここまで、次は唐書より

14.32. 第 32 代 豊璋王 661-668

% A4 , 7956 唐書

(下記部分的に出所不明)

“倭より王子の扶餘豊を迎え、王とした。” 迎故王子扶餘豊於倭 立爲王

“倭國に人質となっていた扶餘豊を迎え王とした。帝は扶餘隆を熊津都督に任じた。” 帝以夫餘隆爲熊津都督 俾歸國

“麟徳二年 665 八月 新羅王と熊津城で合い、白馬を刑し盟を結んだ。”

與新羅王會熊津城 刑白馬以盟 仁軌爲盟辭曰・・・

“儀鳳中 676-679 隆を熊津都督帶方郡王とし、国に帰した。”

以隆爲熊津都督帶方郡王 遣歸國

麟徳・儀鳳 は唐の元号

“(訳)”

安輯餘衆 仍移安東都護府於新城以統之 時新羅強 隆不敢入舊國

“(訳)”

寄理 高句麗死 武后又以其孫敬襲王 而其地已爲新羅・渤海・靺鞨所分 國系遂絶

あとかき